

# 明治期における節用集認識

## Recognition of Setsuyoshu (節用集: Japanese-Kanji Lexicon) in the Meiji Period

佐藤貴裕<sup>1</sup>

SATO Takahiro<sup>2</sup>

[キーワード Keyword] 辞書史 言語生活史 下田歌子 鶴沢芳治郎 石井研堂 小泉八雲

『明治節用大全』 『(武俠)根来半蔵』 『鯨樂太郎』

[所属 Institution] 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

【要旨 Abstract】本稿は、明治期において、節用集という存在がどのようなものとして認識されたかを、「節用集」の名義「教養書と見る例」「物知りを節用集と称する例」「節用集による識字力涵養の意味」「方法論の模索」の各節により検討したものである。

### はじめに

本稿同様、明治期を対象とした佐藤(二〇二二a)では、節用集や節用集にまつわることがらが、どのようにあるかを粗々記したが、節用集や関係辞書そのものを主な対象とするものであった。次の各説により構成した。

第一節 近世節用集への思慕・回顧

第二節 注意される刊行例

第三節 早引節用集の残影

第四節 辞書における五十音順導入の諸相

第五節 イロハ順を固守する世相——大正期点描補記——

これに対して本稿では、節用集がどのようなものとして受けとられていたか、つまりは受容する側のありようを主たる検討課題とした。各節はそれぞれ独立的だが、第一節を起点として第二・三節の一部が記述されており、第二節のさらなる展開として第四節を受けとることができよう。また、前稿の第一節などは、本稿に入れる方がまとまりがよかったようにも思われるが、再構成については別に機会を求めたい。

なお、本稿と同様に、節用集がいかに認識されたかを記したものに佐藤(二〇二二b)(二〇二三ab)があり、個々の事例を集成・コメントしたものに、大正期の佐藤(二〇二二c)、昭和期の佐藤(二〇二二c)がある。合わせ参照されたい。

### 第一節 「節用集」の名義

〔一〕転換点としての『明治節用大全』

辞書である節用集に、日用教養記事を付録することは一七世紀末に始まるが、一九世紀には、辞書部分とともに付録の充実をも誇る大冊の節用集も編まれる。<sup>(1)</sup> その最たるものが『江戸大節用海内蔵』(文久三(一八六三)年刊)で、付録だけで二分冊の一方を充てるのである。この傾向を極端に強化して和製事典としたのが『(伝家宝典)明治節用大全』(明治二七(一八九四)年、博文館刊)である。<sup>(2)</sup>

その登場にかかわって、次のような発言のあることは注意される。

平凡社の木村久一氏の「百科事典の知識」によると、日本で百科全書の体裁を

(1)

最もよく整えて且つ古いものは「和漢三才図絵<sup>(マ)</sup>」であるそうだが、これは明治になつて銅版印刷で複製されたものが出版されていた。私の小僧時代には古本屋に沢山ごろごろしていただけである。所で明治になつてから、ややその体裁をなしたものは、博文館が発行した「伝家宝典明治節用大全」（明治三十年代？）であろうか。菊判千二、三百ページ、定価一円六十銭であるから、当時としては大冊のもの一つで、これが大きに売れたので、同館は引きつづき「新撰日本節用」「明治少年節用」などを出版した。「節用」という言葉がその頃から流行して、だいぶ方々でも用いられた。（小川菊松 一九五三。六七ページ）

刊年については、明治二七（一八九四）年が正しいのだが、のちに小川が、中規模の出版社を営むことを重視して、発言自体の重みはすくいとりたい。『明治節用大全』の存在感は明治三〇年代には確固としていたのであろう。販売実績が上がリ、多くの人の口の端にものぼるなどして、出版社主の実感に訴えるまでになつていたと見たい。小川によれば、『明治節用大全』以前には「節用」との語が、あまり使われていなかったと読めるが、これも、小川の立ち位置を考慮して解したい。「節用」との要素をもつ書籍が刊行されていても、販売実績が上がらなければ、小川の実感に訴えることもない。それを、当時の実態にふさわしい刊行状況を踏まえたものと見たいのである。『明治節用大全』以前にも「何何節用集」が出版されたことは出版目録上でも確認できる。が、その刊行量まで把握できなければ、当時の出版状況を把握したことはなりにくい。となれば、現場の実感を重視・優先する行き方もありえよう。もちろん、これは、出版人の目に映った商品・商品名の消長というだけで、一般人の「節用集」に対する感覚・印象とは、また異なりうることは承知しておきたい。

なお、小川は『明治節用大全』の流れをくむものとして「新撰日本節用」「明治少年節用」を引き合いに出すが、前者は通常の節用集であり、イロハ・仮名数・意義検索の辞書である。後者こそ、少年向けの教養書であり、真に『明治節用大全』の影響下にあるものだが、小川が、このように異なる二書を例示したのは迂闊ではあろう。もちろん、より注意させたかったのは『明治少年節用』であり、「教養書としての節

用集」である。当時の出版界では「辞書としての節用集」が減少して存在感も漸減してきたところに、「教養書としての節用集」の、盛り返すかのような台頭に強く印象づけられて先の発言となつたのであろう。

ただ、関場武（一九八九）によれば、『明治節用大全』以前にも「節用集」を書名に含めた教養書ないし学習書のあつたことが知られるので、『明治節用大全』から節用集を名乗るものが改めて現われたというのでは必ずしもない。先にも述べたように出版目録での登録の有無を採るか、書籍流通の有りようを実見した者の実感を採るかといえ、後者に就きたいところである。

## 第二節 教養書と見る例

### 〔一〕読書対象として

『明治節用大全』刊行後において、「節用集」との語は、いかようにイメージされるものだったのか。分かりやすく言いかえれば、辞書としての意味合いと、一般教養書としての意味合いがまずあることになる。が、この二種のありようの占める割合は個人によって異なるはずである。それぞれの教養や辞書使用頻度、節用集を所持するかどうか、所持するならどのような節用集か、果ては辞書や書籍への愛着の度合いなど、様々な条件が個人ごとに異なるからである。そうした個人の集合からなる時代ごとの節用集観を的確に把握するのは難事となる。

ならばまずは、目に入った事例を紹介・検討することにより、節用集観を把握するための準備だけでも続けておきたい。本稿での検討はその意味でのものである。

まず、次の例などは、絵入りの『女大学宝文庫』の印象を語られていることから、明らかに「節用集」を教養書視しているものと思われる。

この本はお母様のだつたのを、絵が沢山あるので二人が幼い時分、色々な出版題の文句をつけては、玩弄品の様にして、読む真似をしたりして居たので綴糸なども全然除れて、表紙は跡方もなく引きちぎれて居ました。

大きくなつてからこそ、この本が女大学宝文庫といふ標題だと知りましたが、

其時分は二人で二十四孝本といつて居ました。それは、斯う云ふ節用集めいた本には必ずある二十四孝の絵物語が載つて居たからで、陸續の李の話や、老萊子が老年であり乍ら子供の様な真似をして、親達に自分の年とつたことを知らさない様にした、といふ話などを、奥の四畳半にあつた炬燵に、二人であたりながら、よくお祖母様に聞かせて戴きました。(溝口白羊『少女パーク』本郷書院、明治四四(一九一〇)年刊。九九(一九〇〇)ページ)

柏原司郎(二〇一五)で検索しても「二十四孝」を付録する近世節用集は必ずしも多くはない。『大海節用和国宝蔵』(柏原は刊記により元禄六(一六九三)年刊とするが、付録記事中に「宝永七年」(一七一〇)の記載あり)『女節用集豊家宝大成』(寛保三(一七四三)年刊)『都会節用百家通』(文化八(一八一)年刊)など六本があるだけで、別途、人物別に検索していくらか加えうるところだろう。それだけに「斯う云ふ節用集めいた本には必ずある二十四孝の絵物語」との表現は、明治期における「教養書としての節用集」の台頭を反映してのものだと判断される。『明治節用大全』刊行一七年後の出版でもあり、その影響力を十分に受けてもいよう。

## (二) 礼法書として

近代女子教育史に名を残す下田歌子も節用集に言及することがあったが、近世において女子向け礼法をわずかに記した書籍としてである。

それは、其頃、女礼を練習、実践せしは、將軍、及び、諸侯の奥向にして、諸侯の奥は、恰かも、女子が、礼法練習所の如く、苟くも、中等の資産ある家に在りては、其父母は、相ひ計りて、「わが女も、既に妙齡に及べり。何方の奥へか参らせて、女のしつけを(礼式、作法をしつけ方ともいへり)習はしめん」と云ひあへりしなりとぞ。古への女礼は、斯くの如く、口より伝へ、身を以て、率あるを旨としき。而して、其を、物の本に記したるは、たゞ、僅かに、節用、袖珍本の如き、或は、百人一首の鼈頭に掲げたるなどに(小倉百人一首は、恰かも今の小学読本を習ふが如く、幼年女子の読み習ひしものなるが故に)止まりて、他、

礼法の書として、世に行はれたるは、大抵、男子が学ぶべきものなりしに似たり。然るに、其礼法練習所は、廃せられぬ。節用本は、大方、しみの住居と成りぬ。世の文明に進むに従ひて、一旦、世界、革新の風潮に打ち破られたりし、本邦固有の礼の必要は、世海の、潮の、秩序の進行とともに、益々、高まりもて行きつ。(『女子』普通礼式』博文館、明治三〇(一八九七)年刊。二(三)ページ)

近世の「節用、袖珍本」「百人一首の鼈頭」に女子礼法がわずかに記されるというが、これは流布の広く、目につきやすい書籍に限定して言うのであろう。女子礼法を記す専書もあるのだが、その流布が限定的であったことを含意するのかもしれない。また、明治三〇年当時ならば洋装活字本が主流なので、男子向きの礼法書もその体裁で刊行されていたであろう。「節用本は、大方、しみの住居と成りぬ」と対照的に記すところからすると、画期的な『明治節用大全』の刊行三年後では、いまだ旧態の節用集を前近代的所産とする見方まで転換するに至らなかったものようである。

なお、最後の「本邦固有の礼の必要」を説くにいたる文脈は、一見、現代のグローバルな視点での日本の責任を自覚するのに通じそうだが、当時の世相からすれば、やはり急激な西欧化への反動としての自国文化への自覚と見るところだろう。

それも手伝って国民国家の形成過程の一樣相を垣間見させる例ともなっている。実際、基礎的学習の涵養する学力とは、政権の意図を汲みやすくする能力でもある。そうした回路の存することを意識するとき、節用集も——それを辞書と見ようと、教養書と見なそうと——その一端に連なるものとなってしまう。この点は、第四節であつかう石井研堂『鯨幾太郎』に、より明瞭に読み取ることになる。

## 第三節 物知りを節用集と称する例

### (一) 実際の呼称例として

「生き字引」との表現が現代でもどれだけ通用するか心もとないが、少なくとも誰しも聞けば分かる表現ではあろう。明治期においても節用集が教養書視されるのなら、それを綽名とすることも行なわれよう。ただ、すでに「村中で節用どのと尊まれ」(『柳

樽』八五。文政八（二八二五）年刊）「流浪客節用殿と村で誉め」（『柳のいとぐち』。天保一〇（一八三九）年刊）など近世から見られるところであり、大正期の上司小剣『紫合村』にも主要登場人物が「節用集」と綽名されるので（佐藤二〇二一）、類例が明治期に存するのは当然とも言えよう。

とはいえ、近世のは川柳の例なので検討対象としては文脈その他の情報に乏しく、『紫合村』も小説としての演出があり、その有りようや程度にも注意すべきところである。もちろん、知識人・知恵者を節用集と呼ぶことが現実社会に存するからこそ、小説もそれに倣うのだろうが、その倣いが正確に現実社会のなぞりであることを、つまり、現実社会でそうした例があることを確かめたく思うのである。

ただ、そうした実例に接することは少ない。綽名を記録にとどめる機会もないからであろうが、あるいはすでに明治期では節用集を譬喩ないし表現の具として援用する価値が、文芸世界ではともかく、現実社会にはなくなっていたのかもしれない。

ともあれ、一つでも多くの有望な例を探し出し、本格的な検討のための準備をするにしくはない。とりあえず、竹本長門太夫（四代）の『増補浄瑠璃大系図』の例から見ることにしよう。

鶴沢芳治郎 二代目清七高弟にて享和年中より師に随ひ修行をす。其後師に附て東京へ赴き彼地にて評判宣敷、追々出精して文政九年戌春師と共に帰坂致、直様御霊社内芝居致、同十一年子の春より式段目の大役を勤る。然る処足病を煩ひ歩行成がたく、無余儀稽古のみ致し暮さる。尤此人、節用集と迄人呼で浄瑠璃道に於ては何知らぬと言事なく、実におしき人哉。命数有限て終に故人とはなられし。門弟も数多有共、悴鶴沢清三事も早く世を去し故、不詳死去月日共、追々聞調後に出す。（『増補浄瑠璃大系図』二〇。川上邦基編『音曲叢書』六、演芸珍書刊行会、一九一五）

「節用集と迄人呼で浄瑠璃道に於ては何知らぬと言事なく」とあるように、隈なく知りうる人が「節用集」と呼ばれていたことになる。また、「節用集と迄人呼で」と

あるのは、物知りの程度を高く見積もり、それに対して「節用集」と綽名するのだから、知識に対する相当高度な評価のための表現であることが知られる。

このように「節用集」と呼ばれる背景まで知られる貴重な例のだが、生没年不詳ながらも鶴沢芳治郎の活躍期が近世にあることからすると、「節用集」と呼ばれていたのは近世においてであって、本稿の対象ではないかもしれない。

ただ、編者・竹本長門太夫（四代）の生没年は一八一四〜一八九〇年であり、『増補浄瑠璃大系図』の最新部分は一八八六年である。

此人斯道の故実考証家として重んぜられ、風流韻事を嗜み、文藻に富む。大系図は天保十三年竹本筆太夫近松春翠子合考に成れる『浄瑠璃大系図』（小本三冊）に倣ひ、浄瑠璃開発より明治十八年迄の系図を半紙綴二十二卷（紙数約一千一百枚）に編成したる自筆の著作なり（「四代目竹本長門太夫略伝」。『音曲叢書』二、一九一四）

また、本書の前身である『浄瑠璃大系図』には鶴沢芳治郎の記事は存しないので、竹本長門太夫が、明治期での感覚として「節用集」との評価を記したと考える余地もないではない。しばらく、本稿で扱おうる例としておきたい。

（二）作中例から推して

初代・広沢当昇（一八六九〜一九三七）の講談『（武俠）根来半蔵』（岡本偉業館、一九〇八刊）での例ながら、節用集と呼ばれる人物のありようが明示されるので参照しよう。「政五」は「其頃大垣の城下で田町に住居をする、美濃一ヶ国の大貸元岐卓の政五郎親分」（四一ページ）で、「誰知らぬ者もねへ美濃一ヶ国の大貸元」（四二ページ）である。政五郎は、大垣藩町奉行・小畑六郎兵衛と、家中の根来半左衛門の後添え・お牧との不義密通を、六郎兵衛の中間・市助から聞き知ってしまった。

政五（中略）こいつア困ったなア、町奉行の悪い事をする者をお捌きなさるの誰方かしら……エ、清水町の節用集の格兵衛、これは万年暦の格兵衛とも云ふく

らみで、この爺は大変な物識だ。一ツこれに尋ねて見やう」と云ふので清水町の節用集格兵衛の所へ出て参りました。(八一ページ)

政五「爺さん、それを捨て、置けるくらゐなら、斯うして何もお前に尋ねに来はしないヨ、活きた節用集だとか、万年曆だとか云つて、綽名を取つて居るお前だから、わざわざ尋ねに来たのだ、このくらゐのことが分らぬやうぢやア活きた節用集ぢやアねへ、汝は亡者格兵衛だ(八八ページ)」

やはり、節用集と呼ばれる人物は「大変な物識」とされている。「万年曆」と併置されるのも興味深い、「活きた節用集」との用い方もあったことが知られる。また、物知りの程度としては次のような例が参考になろう。

格兵「ヨシ、さう頼まれりやア仕方がない、ぢやア認めて遣らう」と節用集の格兵衛、これは今日で云つたならば、マア博士とでも云ふのでございませう、名題の物識で、その始末を精しく認めまして、之れをチャンと折り畳み表に上の一字を書いて

格兵「サア政五郎、これを出すのだ、併しこの願書をば戸田五郎左衛門様が御覧なされたら、これは余程上の事に精しい者が書いた、何者が認めたのであるかとお尋ねなさるであらう、そのときに汝は何う云ふ返事をする積りだ(八九〜九〇ページ)」

政五「(中略)斯う云ふことを知つて居るのは清水町の、か……」

五郎「その後は何うぢや

政五「エ、か、か、か……」

五郎「早く申さぬか、其方の申す清水町のかと云ふのは、活きた節用集の格兵衛の所へでも聴きに参つたのであらう(九七ページ)」

「今日で云つたならば、マア博士とでも云ふのでございませう」とあるのは、やはり知識に対する最高度の評価である。その知識は、藩当局への願書という形で発揮されており、高度な実務向きの書式なども含むことになるようである。「博士」からすれば学知かと思いがちだが、また別種であることは注意されよう。

その願書に対応した武士(五郎)でさえ、「清水町のか」と聞けば「活きた節用集の格兵衛」と即座に思い至るのだから、知恵者ぶりもよほど著名なものだったことになる。格兵衛自身「余程上の事に精しい者が書いた」と自認するのも注意される。

また、節用集に注釈がなされたこと自体も興味深い。『少女パーク』には明示的な注釈はなかったことからすると、「節用集」への注が必要な層と不要な層とが併存したことが窺われるのであり、節用集が忘れられていく過程が段階的であることが知られるのである。事物の忘れられ方として自然な推移であるから、明治末期には、節用集の存在感が薄れていくという方向性も確実に存したと捉えておきたいと思う。

#### 第四節 節用集による識字力涵養の意味

##### (一) 『鯨幾太郎』の節用集

石井研堂の『鯨幾太郎』(明治二七(一八九四)年刊)にも節用集が登場するが、そこでは単に辞書として扱われている。ただ、この作品の立志譚的内容と、当時の社会状況を重ね合わせて考えるとき、注意される例になろう。先に下田歌子の所感に見たのと同じ、国民国家への過程を意識・前提する学習材として登場するのである。

『鯨幾太郎』の小説としての粗筋はたとえば次のように要約される。

捕鯨業を背景とする小説である。紀州捕鯨場三輪崎に羽刺の子として生をうけた幾太郎が、年十五歳にして孤島に漂著した。其後幾多の艱難を経て、米国捕鯨船に救助されて米国にわたつた。そこで、彼はカリホルニア金山にゆき、資金を調達し米国流の捕鯨設備ある船を借り入れ出漁した。カムチャツカ辺に捕獲を営み大鯨を博して故郷に錦をかざるといふ筋である。安政年間より明治初年迄の時期である。(「祭魚洞文庫所蔵 日本捕鯨史料文献解題」。日本常民文化研究所)

## (一九四四) 所掲

イギリスとの領土問題も漏らせないとこだが、それは後述するとして、表現面では、研堂の真面目である漂流・捕鯨など海軍事項を中心とする、詳細で濃密な描写も印象的である。それが、この少年向けの小説に、一種の分厚さや迫真感を与えることにも寄与しており、ドキュメンタリ的演出に成功しているとも見られる。

節用集もまたその例に漏れない。最初に登場するくだりを引用しよう。無人島に流れている幾太郎らは、ある日、岩窟で白骨死体を発見する。

船板を起して見るに、微かに文字の跡ありければ、土を払ひて諦視すれども、僅に天明〇年と見ゆるのみにて、永く土につきたれば、朽ち果てし、其他は読み難し。(中略) 半ば腐りし行李の中に、男子の髪の毛のまげ一つ、一尺六寸ほどの白鞘腰刀、節用集一冊、小使帳の腐れ残り僅かばかり、木綿糸に針鋏のさびたる物、及び石を磨りて作りたる煙管となり。(四一ページ)

大型廻船、ことに北前船などの商船であれば特にそうだが、船頭のほかに会計・事務担当者が乗り込むものであった。漂流者の遺品に辞書類があっても不思議ではなく、むしろ「節用集一冊」が真実味を与える演出として効果を発揮しているように見たい。この節用集に、主人公・幾太郎は親しく接し、文字の習得にも励むことになる。

絶えて手を下すべき仕事もなきにぞ、幾太郎は、岩窟にて得たる節用集を、無二の朋友となし、其図画を見、其和漢名将伝を読み、又は、知らざる字を拾ひ出すことを、何よりの楽しみとなし、(四五〜四六ページ)

幾太郎、其つれづれなるに方りては、節用集を繕きて文字を暗誦し、又山巔に登りて鯨の出没を望むを常とせり。節用集には、猶知らざる文字多く、鯨は例によりて頭尾相接す。(六二ページ)

具体的な書名は記されないが、この節用集には「図画」と「和漢名将伝」が載っている。柏原司郎(二〇一五)で検索すれば、先の引用中の「天明〇年」(一七八一〜一七八九)以前の節用集で、「和漢名将伝」を付録するものは見あたらないが、類似する「和漢武将図」を付録するものに『百万節用宝来蔵』(明和六(一七六九)年刊)のあることが知られる。

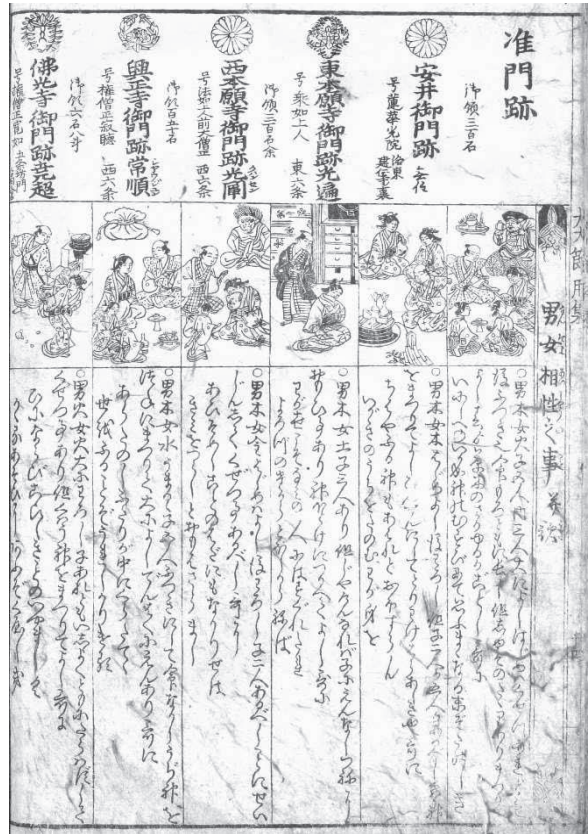
したがって、この先人漂流者の遺した節用集の実体はいま一つはっきりしないのだが、早引節用集(イロハ・仮名数検索)の類ではない確率がきわめて高いことにはなる。早引節用集では『(明和新編)早引大節用集』(明和八(一七七二)年刊)のような例外を除けば、日用教養記事をほぼ付録しないからである。

## (二) 日用教養記事を付録する節用集の選択

ただ、早引節用集が宝暦二(一七五二)年以降、急速に利用者を獲得していくことになるから、「安政年間より明治初年迄の時期」に時代設定された『鯨幾太郎』に早引節用集が採用されなかったことの意味は、問う価値があるだろう。

研堂は、早引節用集以前の、つまり一七世紀末以降に増加していった日用教養付録を豊富に擁する節用集を、おそらくはあえて起用したのであろう。ただ、これをそのまま研堂の節用集観——節用集をどのようなものとして捉えていたか——の反映とは断定できない。というのは、『鯨幾太郎』にはいくつかの漂流譚がモデルになっている(水間千恵二〇一六)、その一つに『南瓢記』があるとすれば、これに依拠して日用教養付録を擁する節用集を起用した可能性があるからである。

柳枝軒静之『南瓢記』(寛政一〇(一七九八)年刊)は、奥州名取郡閑上浜村の大乗丸が遭遇した安南国漂着(寛政六(一七九四)年)に取材した漂流記である。ここには日用教養付録を擁する『倭漢節用無双囊』『大大節用集万字海』が登場する。見知らぬ安南の地で筆談による意思疎通を助けては案内役となり、「男女相性之事」「扶桑百将伝」などの付録挿絵を介しては視覚による文化交流の媒介をするなど大活躍する。果ては安南・中国に寄贈されて国宝になるといふ、際立って印象的な存在として描かれるのである。



『大節用集万字海』(明和七年刊。東京学芸大学望月文庫本) 織維の経りが多く見られ、旧蔵者の愛読がしのばれる。

この魅力的な『南瓢記』を、漂流記の収集・研究者である研堂が知らないとは思えない。具体的な節用集の活用例を知ればこそ、ドキュメンタリ演出としても『南瓢記』に起用したと考えたくなる。ならばそれは、『南瓢記』という確実な典拠のある、日用教養記事を豊かに付録した節用集でなければならなかったのである。

(三) 回収される伏線

幾太郎は、無人島で亡くした父と寅吉のために石碑を作ったが、さらに洪水にも耐える記念碑を造りたいと願い、達成する。これはいわば、文字学習の成果を示すことでもあるので、節用集起用の伏線が回収されたことにもなっている。

新に盤石面に大文字を遺すにしかず。と、大胆なる望を起し、浮世の係累なき島上のことはいひながら、日子を惜まず、日毎に懸崖に攀じ登り、截ツたちたる石壁面の中央に、日本紀州三輪崎浦住吉屋幾蔵伴幾太郎持地鯨島、脇書に安政

三年と、何れも三四尺四方の大文字を彫りつけ、下より望みてはあしき所を改め、昇りては又彫り、数ヶ月を経て功を終へぬ。(六四〜六五ページ)

ただ、この識字力の獲得を、節用集すなわち辞書による学習にのみ求めてよいかという問題もある。当時の文字習得には往来物諸本のような文脈付きのテキストが必須だからである。ただ、幾太郎の場合は、無人島での話であり、師匠もないという特殊環境下でのことである。辞書による文字学習達成の特殊ケースとして認めてよさそうである(佐藤二〇二三b)。

一方、漂流以前に一定の学習が成されていた可能性も考えられるが、紀州三輪崎浦での学習風景は文字習得にかかわる行為は最低限のものであり、父親からの教育も、様々な話題からする、いわば読み聞かせが中心だったと設定されている。

幾太郎は、年長くるに従ひて、帆を操り天氣を占ふことまで、殆ど成人に譲らざりければ、父もひそかに望みを届け、庭の教へを忽にせず、我家の昔を語らうて、航海を励まし、又読み書きの道に達せざれば、人の上に立ちがたしとて、家にある間は、少しづつ筆を執り本をも開かせ、只管に其生長をのみ楽みけり。(中略)影うす暗き行灯の光を分けて、父親の網の破れを繕ふ傍に、今川状の素読を習ひ、又連陰の日の徒然に、怪しげなる炉を囲みて、武将功名咄を聞く外を知らず(一六〜一七ページ)

したがって、高度な文字使用については、漂流後の、節用集による学習が大きく寄与したと考える余地が十分にあることになろう。

なお、さきに、無人島で発見された節用集を、日用教養記事を多く付録したタイプのものとして推定したが、日用教養記事を文脈付きの教材と見なせるなら文字習得にも有利なことになる。文字の実用的な運用面まで学ぶには文脈のある教材が必須だと推測されるからだが(佐藤二〇二三b)、この点からも、幾太郎の節用集が日用教養記事を付録したタイプであることは設定としても無理がないことになる。ただ、研堂とし

ては、単に『南瓢記』に準じて起用したまでのことではあるが。

〔四〕識字力獲得の意義

苦心して彫りえた断崖壁面の記念碑に話をもどそう。この記念碑は、後年、日本領土の拡大の明証となるものである。

かの最大なる北岸の洞穴前にブリッデン女王陛下の船プロックムの首長エフ、ダブリュー、ヒーチエー、千八百六十五年八月十四日ブリッデン女王陛下ビクトリアの名を以て此諸島を領せり。との文を彫りたる銅版を、固く釘つけおきければ、大将憤怒の血眼を見開き、己れこそわが領島を押領せる盗賊なれ。と、直に之を散々に断破し、汝彼の崖頭の大文字を読めざるかと、生きたる人にもいふ如く、冷罵熱罵の限りを極め、(中略)翌日も此島に上りて、かの打ち破りたる銅版の傍に、大日本紀伊国住吉屋幾太郎之を剥ぐと彫りつけ、尚此島の地形高低経緯度等を精測せり。(二七二―二七三ページ)

島中の崖に彫りつけたる大文字と、さきに大将の流したる文書の、わが根室国に漂着しけるものとは、共に先得権あることを証するに足り、幸に血を流すに至らずして(英国との——引用者注)こと止みぬ。従来わが国最南の属島小笠原島より、更に南方数百里の此島に、本邦の版図線を描するを得しは、偏に、大将の慧眼、よく占領策の緒を為せし結果に外ならず。されば、後日大将の従五位勲四等に叙せられ、菊授章を拝賜せしは、捕鯨上の功績著しきにもよるとはいへ、主としてこの偉功に因るものなりき。(二八二―二八三ページ)

このように節用集による文字獲得は、幾太郎(大将)に無量の栄誉をもたらすことになった。もちろん、それは幾太郎一人のための利益ではなく、版図拡大という日本国にとっての福音だったことによるのである。

版図の拡大が征服戦争によることが少なくないことを想起すれば、「幸に血を流すに至らず」に達成されたことは注意されよう。国家として最も大きな功績の一つを、

識字力の発揮により最も平和裡に行ないえたことが肝要なのである。子ども向けの読物であれば、やはり初歩的な学習の尊さをそれとなく、時には明瞭に示す必要があるはずで、そのことは『鯨幾太郎』より早く少年雑誌『小国民』の編集に携わっていた研堂には分かりきっていたであろう。それをもっとも効果的に組み込みえたのが『鯨幾太郎』だったということになる。

ただ、基礎的学習により識字力を高めることは、富国強兵策を受け入れる、あるいは国民国家の形成に資する必要条件を満たすことにもなる。とはいえ、近代的な生活を送るうえで無知であることも許されない。改めて述べることもないが、節用集もまた、明治なかばの世情にあつては、そうした流れを押し進めることに寄与せざるをえない存在だったのである。

第五節 方法論の模索——おわりにに代えて——

小泉八雲が、チェンバレンに宛てた書簡(一八九四年三月一八日付け)の一節に「永代節用」に触れた箇所がある。

What a wonderful old book is the Ei-tai Setsuyo (not sure if I Romajify it rightly), a sort of domestic Encyclopedia. Someone has lent me a copy. — I was very much struck by the curious Buddhist folklore about the child in the womb, and the birth. The midwife is Sozababa; she strips off the clothing (the caul) of the newborn. The images of death forms strange poetry for the images of life. Do you know the book? (関田かおる 一九八三)

「永代節用」というとき、まずは『永代節用大全無尽蔵』『(大日本)永代節用無尽蔵』『(早引)永代節用集』の三本が浮かぶが、ソ(ウ)ズババを載せるものはない。ただ、『永代節用無尽蔵』(天保二(一八三一)年刊)のサ部神仏門の最後に「奪衣婆」が見えるが(三三三―三三三)、訓を「さうづがはのうば」とし、割注に「三途川の婆也」と添えるばかりである。ソ(ウ)ズババとの読みや、奪衣婆にまつわる話に





『永代節用無尽蔵』（天保二年刊。国文学研究資料館本）

ついでには、八雲は別途知るところがあったのであろう。

八雲が『永代節用無尽蔵』を「ワンダフル」と評し、渡日の先輩格であり言語学者でもあるチェンバレンに「知っているか」と問いかけたのは興味深い。感激のあまりの衝動なのだろうが、八雲の感動のポイントはいかようなものだったのだろうか。

書簡の流れからすれば、亡者の衣服をむしりとる奪衣婆と、新生児を抱衣からとりだす産婆とに、行為の類似性ないし意味の重なりを見出しうるというのだが、そのよ  
うな、八雲の心惹く連想をよぶ「奪衣婆」なり「さうづがはのうば」なりが、ただの「家庭百科事典」に載ることの意外さが驚きを招いたのであろう。

では、『永代節用無尽蔵』自体の有りようには、驚くことがなかったのだろうか。たとえば、「奪衣婆」「さうづがはのうば」といった用語が載るには、相当数の収載語の拡張が必要であるから、そうした編集面での労力を強調する象徴としてソ（ウ）ズババに通じる「奪衣婆」を提示して見せたということかとも思えてくる。

いずれとも捉えられるし、いずれかを選ぶべきとも思え、あるいは別の選択肢がある  
と見込むべきかとも思われてくる。そのいずれと判断するのも材料が足りないとい  
うのが本当のところである。

ただ、人間と節用集との関係をよりよく把握しようとするなら、どんな形のもので  
あれ、節用集に対する思いの例を的確に捉えようと試み続ける必要があることだけは  
たしかであろう。試みをやめてしまえば停滞するしかないからである。

こうした考察について手助けになりそうなのは、歴史学における、心情史（論）や  
感情史（論）の手法であるように思える。これらの論法を国語学に導入することで、  
単に節用集研究にとどまらず、広く言語生活（史）研究が新たな展開を見せるので  
ないかとの予感はあるが、それは、研究者という、成果を発信する側の希望的な観測  
なのかもしれない。受け手の側の問題、つまり新しい手法による成果が正当に評価さ  
れるかどうか、また別の問題として残されることになるのではある。

注

(1) ただし、単純に辞書・付録の充実を企図したというのではなく、台頭する早引節  
用集に対抗する手段として、そうせざるをえなかったものと考えている。

(2) 便宜的に「事典」との用語を用いたが、次に示すように不審とする向きもあつた  
ようである。

所で平凡社は「大百科」に「事典」という言葉を新造して用いた。「事典  
とは何の事だい、語を成さぬではないか」と、その当時は冷かされたもので  
あるが、今では猫も杓子もといった具合に「事典」大流行となり、同社独特  
の専用語が、勝手に侵害された形である。（小川菊松 一九五三、六八―  
七〇）

余談ながら、国語学会は『国語学辞典』『国語学大辞典』を刊行し、日本語学会  
と改称してからも『日本語学大辞典』を刊行した。内容としては「事典」的である  
にもかかわらず「辞典」を称してきたわけだが、あるいは「事典」に「語を成さぬ」  
といった感覚を持つ関係者があつたのかもしれない。

(3) 実話に基づくことは冒頭近くの経緯説明に認められる。

そもこの読物の出所を尋ねますれば、元来当昇の父は浪花節三味線の元祖でございまして、広沢岩助と申しましたが、明治維新前のごとき(中略)、その際大垣の御家中に根来半太夫と云ふお方がございまして、我より三代前の根来家に斯う云ふ事実があつたと云つて、逐一お話を下さいます、それを桑吉なり当昇の父が承はつて、尚ほ右の鯛飯と云ふお方に種々取調をして貰ひ、これを一の読物として仕組み、聊潤色を加へたまでのものでありますから、決して無根の作話ではございません(一〇三ページ)

(4) この引用には直接関わらないが、この前に、お牧は、弟・成瀬軍次に、半左衛門と先妻との実子・半蔵を亡き者にしたいと話している。大垣藩士の子弟が、しきたりとして一三歳になると木曾御岳に参詣するが、引率した軍次は半蔵を谷底に突き落としていた。

(5) このような捉え方が八雲の独創なのか、比較的広く知られた普遍的な常識なのか判断できないでいる。ただ、新生児が胞衣からばかりではなく、竹や桃からも生まれ出る物語があり、その際、老人が立ち会うこともよく知られるところであろう。

参考文献

上田信道(一九八二) 「石井研堂『鯨幾太郎』の受容について」『児童文学研究』一三  
 小川菊松(一九五三) 『出版興亡五十年』誠文堂新光社。清田啓子(一九八〇) 「資料紹介 花袋『縁』中の一モデルの証言」(『駒沢短大文』一〇)によれば、実際の著者は中山泰昌(編集者。一八八四〜一九五八)であるという。  
 柏原司郎(二〇一五) 『近世の国語辞書 節用集の付録 増補改訂版』おうふう  
 佐藤貴裕(二〇二二) 「節用集終焉期の諸相——大正期点描——」『近代語研究』二二  
 佐藤貴裕(二〇二二a) 「節用集終焉期の諸相——明治期点描——」『岐阜大学教育

学部研究報告 人文科学』七〇—二

佐藤貴裕(二〇二二b) 「平成期における節用集認識——隣接分野を中心に——」『国語語彙史の研究』四一

佐藤貴裕(二〇二二c) 「節用集終焉期の諸相——昭和期点描——」『近代語研究』二二

佐藤貴裕(二〇二三a) 「岡本かの子『落城後の女』における「饅頭屋本の節用集」

『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』七一—二

佐藤貴裕(二〇二三b) 「学習員としての近世節用集」『岐阜大学教育学部研究報告』人文科学』七一—二

関田かおる(一九八三) 「小泉八雲のチェンバレン宛未発表書簡——翻刻および解説

——」『早稲田大学図書館紀要』二二・二三

関場 武(一九八九) 「明治少年節用・少女節用」『芸文研究』五五

全国浪花節奨励会(一九二四) 『浪花節名鑑 増補』

日本常民文化研究所(一九四四) 『社会経済史料雑纂』三、日本常民文化研究所

水間千恵(二〇一六) 「日本生まれのロビンソン——石井研堂の『鯨幾太郎』——」

『児童文学研究』四八

付記

本稿で用いた近世・近代の資料の多くは、国立国会図書館デジタルコレクションに

負うことになった。同事業の今後の充実を期待するものである。

また、本稿は、日本学術振興会・科学研究費基金・基盤研究(C)二〇K〇〇六二

七による調査・研究成果の一部である。